



【ヒアリング結果のポイント】

主な回答内容	第2期計画策定への反映
○ AIの活用 ➢ ChatGPTの公開以来、あらゆる分野でAIの活用が広がり、今後もAIエージェントなど自律的なタスクを実行するAIの実装が加速する。 ➢ 次期計画には当然AIの活用を盛り込むべき。	➡ 前回(第2回)推進会議で示した次期計画策定の方向性において、次期計画には「AIの活用」に関し必要な施策を盛り込むこととしており、具体の施策案については、次回(第4回)推進会議で提示します。
○ データの利活用 ➢ 10年後の目指すべき姿に向かって最重要視したのはデータの活用。データ利活用はSociety5.0の根本(木の幹)の部分である。 ➢ AI推進のため、基礎となるデータ利活用をより一層進めていくべき。 ➢ ロケットや人工衛星関連など民間における宇宙産業は、今後、人工衛星から取得したデータ活用等により、さらに産業として拡大していく。 ➢ データ利活用は、WGを設置して検討はしたものの、それほど進んでいない。 ➢ 機械判読可能なデータはまだ不足している印象。	➡ 今回提示した次期計画の骨子案において、道の役割として(現行計画にはない)「オープンデータ化とデータの利活用の一層の促進」を明記したところであり、具体の施策案については、次回(第4回)推進会議で提示します。
○ 人材の育成・確保 ➢ デジタル人材の育成は、WGを設置して検討はしたものの、それほど進んでいない。 ➢ 行政の人材の確保は専門的知識を持つ人の流出が多く、後退した。	➡ 前回推進会議で示した次期計画策定の方向性において、次期計画には「関係者を巻き込みDXを推進できる人材の育成・確保」に関し必要な施策を盛り込むこととしており、具体の施策案については、これ以外の人材の育成・確保も含め、次回推進会議で提示します。
○ 分かりやすい内容とする配慮 ➢ 現場視察や、現状・課題・方向性など繰り返し意見交換を行うことで、<u>具体的</u>で分かり易いビジョンを示すことを心がけた。 ➢ 図表やイラストを交え、わかりやすくなるよう努めた。	➡ 前回推進会議で示した次期計画策定の方向性において、次期計画は「要点を視覚化・可視化した道民が理解しやすい形で作成する」こととしており、今回提示した次期計画の骨子案も、これに添って作成していますが、今後、関係部局にも協力をもらい、「具体的」といった観点も考慮して、作成していきます。
○ 意見聴取 ➢ パブコメ以外にも多様な意見を聴取する手法を取り入れても良かった。	➡ 今後、具体的な方法について検討し、別途、提示します。

第1期計画策定担当職員ヒアリング



【回答内容一覧】

項 目	回答内容
1 当時、計画策定に当たり重要視した点	● 行政機関や民間企業はもとより、道民の方々にも未来技術の活用・実装による活力あふれる北海道のビジョンを広く共有できる計画とすることを重視した。このため、様々な分野において、実際の現場を視察するとともに、現状や課題、方向性などについて、繰り返し率直な意見交換を行うことで、具体的で分かり易いビジョンを示すことを心がけた。 ● 当時、用語が専門的かつ概念的で難しく、道民に伝わりにくいことから、図表やイラストを交え、わかりやすくなるよう努めた。 ● ミッション、ビジョン、バリューを明確にするために文章で作成、それをビジュアル化することで方向性が直感的に分かるように整理することを重視した。 ● 庁内外への意見照会をこれまでの計画策定時よりも多く実施し、構想で描いた10年後の未来を現実味のあるものへ落とし込むよう留意した。 ● 10年後の目指すべき姿に向かって最重要視したのはデータの活用であった。データ利活用はSociety5.0の根本(木の幹)の部分である。
2 当時の想定より進んだと思うもの	● ChatGPTの公開以来、暮らし・産業・行政などあらゆる分野でAIの活用が広がり、今後もAIエージェントなど自律的なタスクを実行するAIの実装が加速するのではないかと。 ● AIの技術革新は当時の想定以上に思う。 ● 計画策定当初は無かったAIの進歩がものすごい。次期計画には当然AIの活用を盛り込むべきであり、AIを推進していくためには基礎となるデータ利活用をより一層進めていくべきである。 ● 地域デジタル通貨は自治体ポイントやマイナポイントなども相まってかなり普及したように感じる。 ● ロケットや人工衛星関連など民間における宇宙産業の展開が早く、また裾野も拡大している。今後、人工衛星から取得したデータ活用等により、さらに産業として拡大していくのではないかと。 ● 国や道の補助金などもあり、自治体及び企業のツールの導入は大きく進んだものと考えている。
3 当時の想定より進んでいないと思うもの	● デジタル人材の育成、データ利活用はWGを設置して検討はしたものの、予算もつかずそれほど進んでいない。 ● 行政の人材の確保は専門的知識を持つ人の流出が多く、後退したように思う。 ● データもオープンデータの「数」は多くなったが、それをきちんと利活用できるようにすることは必要。データを公開する北海道庁、市町村自身がデータを活用できるようにすることが、よりオープンデータを進めるためには必要だと考える。 ● 機械判読可能なデータはまだ不足している印象。データ連携のプロトタイプは道としての方向性が定まっていなかったと感じる。 ● マイナンバーの活用。現状では、マイナンバーの安全性や利便性が住民の(何となくの)不安を上回っていない印象である。 ● 2で回答したように実証事業は補助金等で多く実施されたが、それが地域に定着してずっと残っているものはまだまだ少ないといった印象。



項 目	回答内容
4 その他	● 当時はコロナ禍ということで、様々な制限がある中での策定という厳しい状況ではあったが、かえって時間的・空間的な制約を克服する未来技術の可能性への認識が高まったように感じた。特にWGにおいては、未来技術の実装に向け基盤となるデータ利活用や人材育成・確保について、具体的かつ建設的な議論が深まったと思う。関係者間で危機感を共有することができたことが大きかったのではないかな。 ● コロナ禍と重なった中での計画推進であったので、コロナに関する内容も多くなった印象であるが、実際の現場はSociety5.0とはほど遠いものであったため、今後はそうならないように計画を樹立推進していただくことを期待する。 ● 当時はコロナ禍で、計画もそれを強く意識したものになっていました。それから状況が落ち着いた今、コロナ禍を経て変わったこと、変わらなかったこと、元に戻ったことなど、改めて検証する必要があるのではないかと思います。 ● (自戒の念をこめて)計画について関係者以外の認知度が低く、広くビジョンが共有されているとは言えない印象。道庁内はもとより、いかに様々な主体を巻き込むかを検討する必要がある。 ● 限られた時間の中で、委員を始め、他県や市町村の方にご意見や情報提供をいただき、当時としては充実したものが作成出来たように思う。 ● 実際の北海道の動きは行政手続きのデジタル化やドローンの活用など、見栄えの良いものがまず進められた印象。 ● 計画の元となった構想自体が当時、先進国などではすでに実装されているものだったため、未来ではあるが、比較的近い未来だったため、もう少しボールを遠くに投げても良かったかなと思う。 ● 他自治体では住民や学生などとワークショップを開きながら作成していったところもあり、パブコメ以外にも多様な意見を聴取する手法を取り入れても良かったなと思う。 ● 計画の絵で描いたように、未来技術の光に照らされながら、インフラ基盤の土壌にしっかりと根を張った木が、データの循環によって育ち、多くの葉を茂らせることがどれくらいできているのか、これから一層、大きな木にしていくためには何が必要なのか、考えていくことが重要だと思います。

※ 第1期北海道Society5.0推進計画の策定に関わった複数職員から得た回答をまとめて掲載。